

日本住宅史の映像化に関する研究（その2）（梗概）

——伝統的日本住宅から現代の住宅に至る住宅様式——

中川 武
須藤 諭

1. はじめに

前年度に行われた（その1）の研究報告においても述べられているように、今日の建築学は技術等の急速な進歩によって専門分野が細分化され、要求される情報は非常に膨大なものとなっている。特に初学者や一般の人々にはその全容をとらえることは非常に重要でありながら、ますます困難なことになっている。現在までの建築学の研究によって得られた成果は、文字によって記録されている。これは専門家にとっては、非常に重要なものであることは、無論当然のことであるが、逆に初学者や一般の人に対する積極的な情報伝達（広義には教育）の手段としては、必ずしも適したものであるとは言えない。さらに、日本の住宅に関して映像教材を試作することについての意義をみてみると、「歴史のイメージをつかむ」という作業が、特に建築の初学者にとって非常に重要なことである。しかしながら、このような作業は専門家にとってさえ容易なものではない。

そこで、本研究は、日本における住宅の歴史について、まずイメージとして定着させることを主眼として、特に初学者や一般の人々に対して簡潔に伝えることのできるように、映像によって教材を試作開発することが本研究の目的であった。このような課題に対して、当研究グループは建築分野の映像化を推進する「日本建築画像大系」の編集委員会^{註1}に参加しており、本研究はその中のテーマの1つとして位置づけられるものとして前年度（その1）研究がスタートし、今年度の（その2）研究によって、当初の目的を達成することができた。

従って、ここではその制作のために検討された記録とともに、試作された映像教材を成果品としてビデオテープの形で報告する。

2. 映像化の方法（第2年度の作業内容）

前年度（その1）研究から継続して作業を進めてきたが、前年度の作業から今年度の作業について示すと、具体的には映像化のプロセスを辿ることになり、各々の段階での検討が必要であった。その映像化の方法についておおよその流れをフロー図形式に表すと図-1に示すよ

うになる。

①から⑥のプロセス、すなわち

- ①構成案（シノプシス）の作成
- ②シナリオの作成
- ③オリジナルテープ素材の作成（撮影）
- ④アドレスコード及びワークテープの作成
- ⑤オフライン編集
- ⑥編集用データの作成

については、前年度に行われた作業であり、（その1）において報告されているので、ここではその後の作業について以下に記述する。

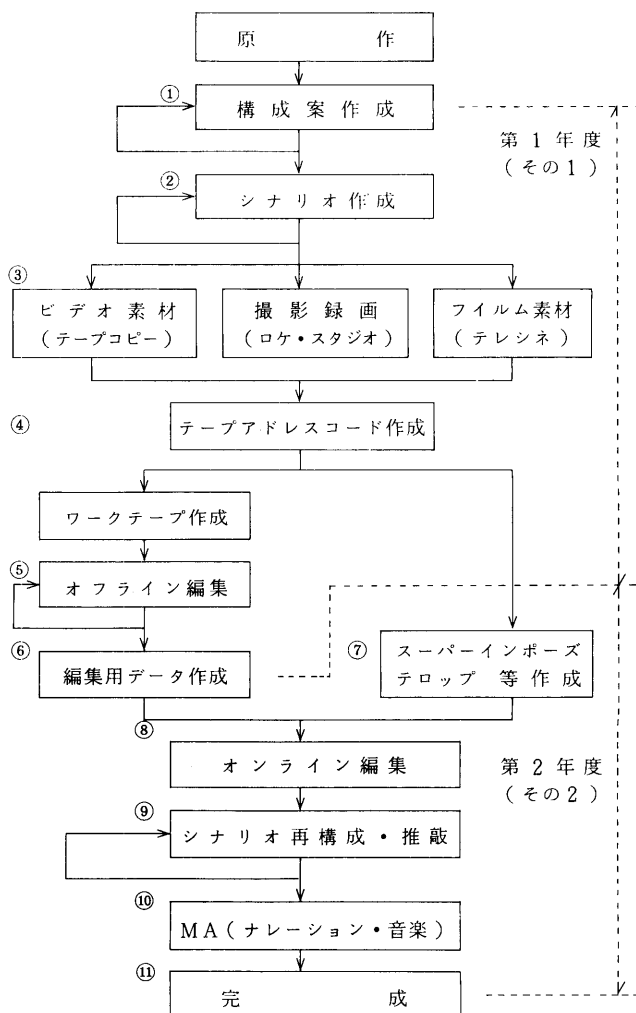


図-1 映像化の方法

⑦スーパーインポーズテロップ等の作成

オンライン編集を行う前に、各場面の必要と思われる箇所に文字によるテロップ等をスーパーインポーズとして挿入することによって映像の理解を助けることができる。そのための文字テロップなどを作成する。

⑧オンライン編集

映像編集の最終段階である。オンライン編集用の専用設備を持つ編集スタジオにおいて行われる。この段階の具体的な作業は、③の段階で作成されたソーステープ(1インチビデオテープ)から、⑥で作成された編集用データに基づいて1カットずつを抽出し、マザーテープ上に継ぐ作業である。

⑨シナリオ再構成・推敲

完成された映像部分に対して特に最終録音に入る前に、シナリオを再度確認することによってナレーション台本・効果音等を検討する。

⑩MA (ナレーション・音楽)

まずナレーション録音を行う。次に音楽の作曲・選定、現実音の作成・選定をし、効果音として録音する。さらに最終的には、これらのバランスを考慮しながらミキシング録音を行って完成する。

3. 完成映像教材「日本の住宅」(ビデオテープ)

映像教材の内容の詳細については、昨年度の報告書にシナリオとして掲載されているが、ここに少しまとめてみると、ポイントとした内容梗概は、以下のごとくなる。すなわち、

「日本の住宅を理解する上で重要なのは、伝統的特質と現代の多様性との関連である。日本の住宅の4つの特質『門と玄関構え』、『床形式の多様性』、『和室のシステム』、『内部と外部の関係』から生活様式等を探り、さらに住宅文化の将来についても展望する。」 (*)

といったものである。そして、その構成は、次の通りである。

- 1) 都市形成の歴史と居住階層によりつくられてきた日本住宅
- 2) 日本住宅に見られる多様性
- 3) 現代日本住宅を理解するための特質
- 4) 特質1・門と玄関構え
 - ・日本人の住宅の理想像
- 5) 特質2・床形式の多様性
 - ・履物を履き替える習慣
 - ・土間、板床、座敷
 - ・北方系と南方系文化の継承
- 6) 特質3・和室のシステム
 - ・書院造り

・座敷の多目的な利用

・座敷の道具

7) 特質4・内部と外部の関係

・庭園と室内の関係

・自然を切り取り内部化する技法

・内部と外部の曖昧な日本の中間領域

・露地と茶室の関係

8) 現代住宅と都市問題

以上の内容を約15分間分のビデオ映像として完成させたわけである。記録媒体は、マザーテープとして1インチビデオテープ、コピーマザーテープとして3/4インチビデオテープとして保存し、一般の視聴には、1/2ビデオテープ(VHS)にダビングの上利用する。写真-1は完成した「日本の住宅」のパッケージである。

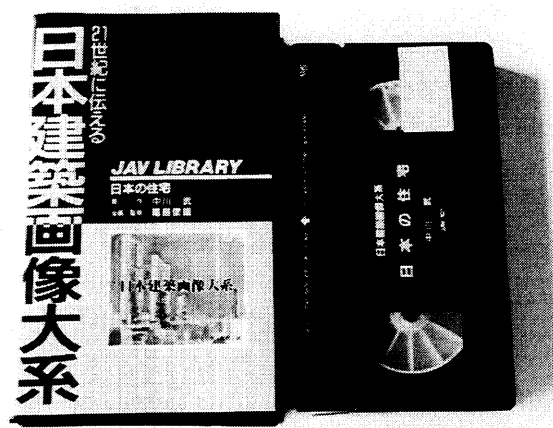


写真-1

4. 制作された映像資料に関する評価

4-1 評価アンケートの方法

本研究の目的は映像化を実践的に行うことであるが、制作された作品の映像資料としての評価についてみてみるために、当初の研究計画には予定されていなかったものであるが、学生に試視聴させる機会があったので、簡単な評価アンケート調査を試みた。調査に当たっては、参考のため、他の作品についても行った。

映像教材を視聴した上でアンケートに回答してもらうという形で協力を得たのは、早稲田大学専門学校の学生約50名である。

設定された質問項目は、まず映像教材を視聴する以前について、

- ①テーマについての自分の知識についての評価
..... (表-1)

次に、映像教材を視聴した後について、

- ②テーマに対する興味の度合いが深まったかどうかに関する評価
- ③テーマに対する理解の度合いが深まったかどうかに関する評価..... (表-2)

表一 1 視聴前の予備知識

質問		非 常 に	か な り	ど ち ら も な い	あ ま ま り	ま た く	
教材を試聴する以前、このテーマに対する自分の知識についての評価	知識があった	1	2	3	4	5	知識がなかった

表一 2 視聴後の興味・理解の深まり

質問		非 常 に	か な り	ど ち ら も な い	あ ま ま り	ま た く	
教材を視聴した後、このテーマに対する興味・理解の度合についての評価	深くなった	1	2	3	4	5	深くならなかった
教材を視聴した後、このテーマに対する理解の度合についての評価	深くなった	1	2	3	4	5	深くならなかった

表一 3 ビデオ教材の長さの評価

質問		非 常 に	か な り	ち よ う ど よ い	か な り	非 常 に	
このビデオ教材の時間の長さ	長い	1	2	3	4	5	短い

また、

④映像教材としての時間的長さに関する評価

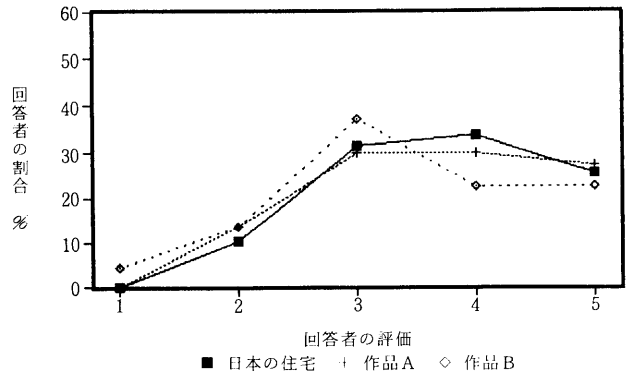
..... (表一 3)

以上4点について、表一 1, 2, 3に示されるように、5段階の評価を答えてもらう形式とした。

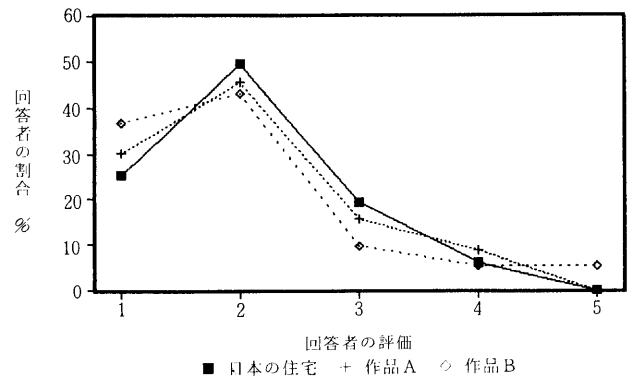
また、本研究と同時期にやはり制作された「日本建築画像大系」の中からも2作品(仮に、作品A, 作品Bとする)についても同様の調査を行った。これについても参考のために示しておく。

4-2 アンケート調査の結果

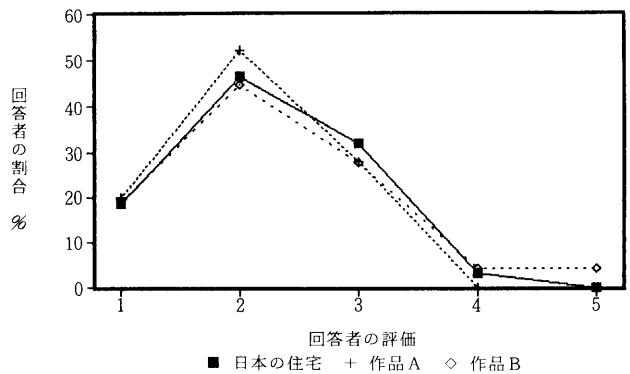
まず視聴してもらう前に、これから視聴してもらう映像教材「日本の住宅」のテーマとするところとして、さきに3. の(*)で述べたようなこの映像教材の梗概程度の説明を行った。その段階において、このテーマについての知識を回答者自身の判断として、どの程度持っていると思うかを、5段階の自己評価をしてもらった。そ



図一 2 視聴前の予備知識



図一 3 視聴後の興味



図一 4 視聴後の理解度

の結果を各評価1から5として回答者の割合を示したのが図一 2である。これによると知識が「あった」と回答した1及び2の回答者の割合は、10%程度であったのに対して、「なかった」と回答した4及び5の回答者の割合は、60%程度であった。

次に、試作映像作品「日本の住宅」約15分を視聴してもらった後に、興味の深まりの度合と理解の度合の深まりについて、各自の主観に基づいてやはり5段階の自己評価を回答してもらった。回答者の割合を示したのが、図一 3及び図一 4である。これによれば、まず興味の深まり具合については、興味が深まったとする1及び2の回答者は、70%以上になり、逆に深まることはなかったと回答した4及び5の回答者は10%未満であった。理解の深まりについてほとんど同じ傾向の回答となった。理解が深まったと回答した1及び2の回答者の割合は、

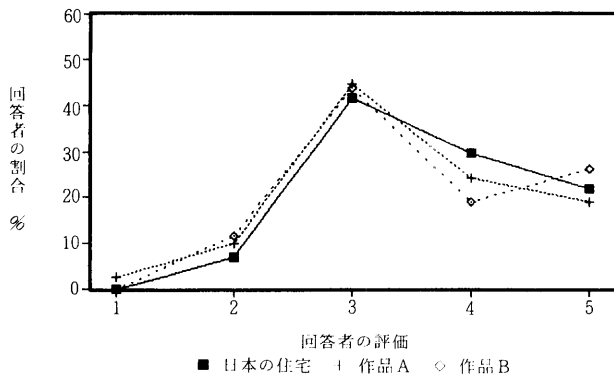


図-5 作品の評価

70%にごく近く、反対に理解が深まることはなかったとした4及び5の回答者は5%程度であった。

最後に、作品としての時間の長さについての質問であるが、結果を図-5に示す。時間的に長いと感じた回答者は1及び2であるが実際には1とした人はなく、2と回答した人の割合は、7%程度であった。逆に、短いと回答した4及び5の回答者は、50%強が該当した。しかしながらちょうどよいとした3の回答者が最も多く40%程度であった。

以上のアンケートによる評価は、図にも表れているように本研究による「日本の住宅」だけでなく、他の作品についてもほとんど同様の評価結果が得られた。今回の回答者50名に限っては、このような映像教材は一応の良い評価を得ることができたといえる。

しかし本来、教材としての良否は専門家による評価を俟たなければならない。さらに、その使用法が良否の重要な要因となることは無論である。

5. おわりに

社会的にもこのような映像教材による教育支援に関する研究は認知されつつあり、この研究プロジェクトの成果等をテーマとしたシンポジウムも既に開催されていることなど、映像情報を教材として活用していくことに対して関心が高まってきていると言えよう。

当研究における成果である映像教材「日本の住宅」は「日本建築画像大系」の中に位置づけられている。本研究の成果を含めたこの大系制作プロジェクトによって試作開発された25のテーマについては、社会一般にも公開されるようになった。^{注3)}当初の研究開発の段階から社会的プロジェクトとしての実践段階へと入ってきたと言えよう。この25のテーマは大系制作プロジェクトの第1期とされ、続いて新たに25のテーマを設定し、これをプロジェクトの第2期として映像化を行うべく、既に研究開発が進展している。

6. 謝辞

映像化を進めていく段階で、撮影、取材、映像提供など様々な形でご協力をいただいた関係各位、また調査の回答にご協力をいただいた方にお礼申し上げます。調査集計に当たっては、三ツ橋達也、大西卓、伊藤千春、辻井健一郎、の各氏のご協力を得ました。

最後に各社の協賛に加え、当財団の研究補助を頂戴し本研究開発の遂行が可能となりましたことに、改めて謝意を表します。

(注)

- 1) 早稲田大学にビデオソフト部会(代表尾島俊雄)として研究母体を設置している。
- 2) 早稲田大学理工学部創立80周年記念シンポジウム「日本建築画像大系—ビデオによる建築教育の可能性—」, 1988年11月
- 3) 参考文献4)のかたちで研究開発の成果を公開している。

〈参考文献〉

- 1) 中川 武:「日本の住宅」,「21世紀建築のシナリオ」(尾島俊雄編・他共著)第1章-1,日本放送出版協会,1985)
- 2) 中川 武,須藤 諭:「日本住宅史の映像化に関する研究(その1)—伝統的住宅から現代の住宅に至る住宅様式—」,財・住宅総合研究財団 研究年報 No.15,1988
- 3) 尾島俊雄:「早稲田大学ビデオライブラリー構想」,早稲田フォーラム第46号,1984-12
- 4) 尾島俊雄企画監修:「日本建築画像大系,第1期建築シリーズ25巻(ビデオ)」,早稲田大学出版部,1989-5
- 5) 須藤 諭,尾島俊雄,他:「建築教育に用いる教材に関する調査研究(その1~その5)」,日本建築学会大会学術講演梗概集,1983-9,1984-10,1985-10,1986-8,1987-10
- 6) 須藤 諭,尾島俊雄:「建築教育に用いる教材に関する調査研究(ビデオ教材の要求度と地域冷暖房解説ビデオについて)」,日本建築学会建築環境工学学術研究発表会資料第1号,1985-6
- 7) 尾島俊雄,須藤 諭:「建築分野における映像資料に関する実態調査」,早稲田大学情報科学研究教育センター紀要VOL.5,SPRING,1987-6
- 8) 尾島俊雄,須藤 諭:「建築分野における映像資料に関する実態調査(その2)」,早稲田大学情報科学研究教育センター紀要VOL.10,AUTUMN,1989-8

〈研究組織〉

主査	中川 武	早稲田大学理工学部教授
委員	鈴木 恂	早稲田大学専門学校教授
	渡辺 仁史	早稲田大学理工学部教授
	嘉納 成男	早稲田大学理工学部教授
	須藤 諭	早稲田大学情報科学研究教育センター助手